

「私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」

(コリスト人への手紙第一13章12節)

クリスチャンとして、いぶかるのも当然で、無理からぬ疑問があります。それは、天国で、愛する者たちの見分けができるのだろうかという疑問です。確かに、この主題を具体的に扱っている聖句は皆無ですが、いくつか推論の筋道はあり、それらを辿っていくと、肯定的な結論に導かれます。

第一に、弟子たちに、復活した栄光のからだのイエスを見分けることができた点です。主の外見には変化がありませんでした。それが、「この、同じイエス」(使徒1・11英訳)である点については疑問の余地がありませんでした。このことから、私たちもまた、栄化されたからだになつてはいるものの、それぞれの特徴はそのままであることがわかります。私たちの外見が一様になる、と暗示するものは、何一つありません。ヨハネ三・二で、私たちが主イエスに似たものとなる、というのは、内面の在り方のことで、永遠に罪とその結果から解放されるという意味です。それが、主と間違えられるほど外見が似るという意味でないことは確かで、あり得ないことです。

第二に、天国に行つたら、地上にいたときより知りうることが減少すると信すべき理由は一つもありません。地上ですらお互いが分かることに、天国でも分かるのはおかしい、と考えるべき理由がどこにあるのでしょうか。そのときには、今、私たちが知られているほどに知ることができる、と書かれているなら、結論が出ているも同然です。

パウロは、天国で会つたときには、相手がテサロニケ人であると分かるのは当然である、と期待しています。「御前で私たちの

望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか」(1テサロニケ2・19)。

今まで一度も会つたことのない人でも、それが誰かを見分けられる能力が人には与えられている、または、与えられるようになると暗示する箇所が聖書の中になります。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、あの変貌の山で、目の前にいるのがモーセとエリヤであるとわかつたのです(マタイ17・4)。

ハーデスに行つた金持ちは、アブラハムを見て、それと分かりました(ルカ16・24)。ユダヤ人たちは、御国に入つたら、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして、すべての預言者に会うことになる、とイエスは語りました(ルカ13・28)。私たちの財産を賢く管理して、友を作るべきこと、そうすればその友人たちが、やがて私たちを永遠の住まいに迎えてくれる、と教えられています(ルカ16・9)。つまり私たちを見れば、恩恵をもたらしてくれたのが私たちである、と彼らに分かることが前提となつてゐるのです。

ただし、一言、注意をつけ加えねばなりません。天国に行けば、愛する者を見分けることができるるのは明らかだと思われる半面、地上にいたときと同じ関係で、お互いを知ることはない、ということです。例えば、夫婦という関係は、もはや通用しません。「復活の時には、彼らはめとつたり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使いのようなものである」というマタイ二二・三〇のみことばは、それを明確に教えてはいるよう思われます。

「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわざかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

（ルカの福音書10章41-42節）

マリヤは、静かにイエスの足元に座り、みことばに聞き入っていました。その一方でマルタは、食事の支度をしながら、慌て、冷静さを失っていました。マリヤが手伝いに加わってくれないことに腹を立てたのです。主イエスは、マルタの接待ではなく、その背後にある心を正そうとされました。それに加え、マルタの優先順位が間違っていることが示唆されています。奉仕を礼拝より重んじるべきではなかつたのです。

私たちの多くは、マルタと似たところがあります。座つているより、何かを成し遂げたいのです。何事も、きちんと計画を立て、効率を考え、完遂できることが誇りです。朝、聖書を読んでいても、しなければならないことが六十件もあつたことを思い出し、聖書を読むのを中断してしまうことがよくあります。たとえ祈つても、その日の予定を考えると、思いがダンからべエルシエバ（※イスラエルの北端と南端の町）まで迷走してしまいます。一緒に汗を流してくれる人がいないと、すぐに恨めしい気持ちになります。みんながやらなければならないことを、自分だけがやつていると感じるのです。

その一方で、マリヤと似た人々もいます。愛の人々です。その生き方からは、他の人の愛がじみ出ています。そのような人々にとつては、炊事道具より人間の方がもつと大切です。とりわけ愛情の向く先は、イエス御自身です。彼らは、マルタのような私たちから見れば怠けているように見えるかもしれません

せんが、そうではありません。彼らの場合は、優先順位が違っているだけなのです。
実は、私たち自身も、有能で才能に恵まれていながら冷淡である人より、暖かく愛情に溢れた人の方を高く評価するものです。私たちの心を捉えるのは、おもちゃに夢中で私たちが目に入らない子どもより、抱きついてキスをやめない子どもなのです。

「神は、私たちの奉仕よりも、礼拝に関心を寄せておられ、また、天の『花婿』は花嫁に求愛しているのであつて、召使にしようとおられるのではない」と言つた人がいますが、まさにその通りです。

キリストは断じて求めておられない

御足のもとに座る間もないほど

労働に忙殺されることを

忍耐強く待ち望む姿勢こそ

主はしばしば最上の奉仕と見給うなり

マリヤは、良い方を選びました。それを彼女から取り上げてはならないのです。願わくは、私たちもみな同じ選択をするものでありますように！

「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」

(ヘブル人への手紙13章2節)

来客を歓待することは、聖なる義務（「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」）であるだけではありません。その中には、栄光に満ちた驚くべき約束が含まれているのです（「こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました」）。

その日は、アブラハムにとり、特段変わったこともない日として始まりました。天幕の入口に座っていると、突然三人の男たちが目の前に現れます。族長であるアブラハムは、典型的な東の礼儀作法で対応します。彼らの足を洗い、木陰の涼しいところで休憩できるようにし、牛の群れのところまで出て行つて子牛を探し、妻のサラに、「パンを焼いてくれ」と頼んで、豪勢な食事を供したのです。

ところで、この三人とは何者だったのでしょうか。二人は、御使いでした。三人目は、主の使いでした。主の使いとは、人として現れた主イエスだつたと考えられます（御使いが「主」と呼ばれている。創世記18・13参照）。

このように、アブラハムは御使いをもてなしただけでなく、受肉される前にたびたび姿を現された主を、一度はもてなしているのです。そして、驚くべきことに、私たちも同じ特権を持つていると言つてもよいのです。

神を畏れ敬う人々を家に迎えて、どれだけ祝福を受けたかを証言してくれるクリスチヤンの家族は数え切れません。神に対する好ましい印象が、子どもたちの心に刻まれ、それが一生残るのです。主に対する熱心さに再び火がつき、悲しんでいた心

が慰められ、問題が解決していきます。家庭に祝福がもたらされたのは、ほかならぬ来客という名の「御使い」が、来てくれたおかげなのです。

しかし、主イエスを賓客としてお迎えすることは、比べようもない特権です。主の御名によって、主に従う人を一人でも迎えるのは、主ご自身をお迎えしたことと同じです（マタイ10・40）。本当にそう信じるなら、今までにないほどに、もてなしという素晴らしい働きに、出費も自分の時間も惜しまず捧げることでしょう。そして、「つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい」（Iペテロ4・9）というみことばを実行に移し、あらゆる来客をキリスト御自身であるかのように迎えることでしょう。そうするときに、私たちの家庭は、イエスが喜んで訪れた、あのベタニヤのマリヤとマルタの家のようになるのです。